

## 日本鉄鋼協会専務理事に就任して

木 下 亨

去る4月2日通常総会において理事に選出され、専務理事の役職を抑せつかりました。18年余にわたって当協会の発展に心血を注いで来られた田畑新太郎先輩の後継者として、その責任の重大さを痛感しています。時あたかも、科学技術立国第1年と言われ、政府も初めて技術とくに独創的技術の創出ないし振興に本格的に取り組む第一歩を示した年です。

私と鉄鋼協会とのかかわりは、通産省の要請により昭和24、25年に協会が実施した平炉調査団、熱経済技術調査団の全国各工場への派遣の際、幹事の一人として参加した時からと記憶しています。役所に入つて2、3年目の若僧だった私にとって錚々たる団員の諸先輩から生の技術を教えていただいた誠に貴重な経験でした。昭和23年当時の山岡武会長のもとで鉄鋼技術研究連絡会が発足し、通産省、鉄連、協会の各研究部会を鉄鋼協会研究部会を強化拡充して一本化することとなり、これが29年には鉄鋼技術共同研究会、38年からは協会共同研究会に組織がえになつたわけですが、この共同研究会の活発な活動は今日の日本鉄鋼技術の進歩にどれだけ寄与したかは計り知れないように思います。戦後復興の緒についた時期に技術者各位に切磋琢磨する場と気風を作られたことは先見の明と云うべきでしょう。

在官時代に理事、評議員、共同研究会総務幹事、標準化委員会幹事長等いろいろ協会事業にタッチさせてはいただきましたが、今回協会に入つてみてその事業範囲の大きくなつたこと、国際的にも大変な活動をしていることに驚きを感じました。日本鉄鋼業が技術的に世界に冠たる処まで成長している現在としては当然のことかも知れませんが、他の内外学協会に比してよくここまで来たという実感です。とくに春秋2回の講演大会での発表論文数が回を追つて増加し、今や年間1500件にのぼるに至つたことは大変うれしいことです。これは研究者技術者の数が他国に比しかなり多いことが基本ではありましようが、各社指導者が積極的に発表を促進されているためであろうと思います。ただ残念なのは大学からの発表論文があまり増えていないことです。財政上の制約で思うような研究ができない向はあろうと思いますが、先生方の一そうの奮起をお願いいたしたく存じます。

現在、日本経済は低成長時代に入つたと言われます。また量より質の時代とも言われています。鉄鋼業もまさにこういった時期に立ち至つてきていると思います。鉄鋼生産は長期的にはまだまだ伸びると確信しますが、少なくともその伸び率は過去に比し問題にならない小さいもので、質の向上こそ重要課題でしょう。品質はもちろんのこと、生産性、能率等省力省資源による合理化が焦点となつており、また技術のただ乗りを批判されているのに対し独創的技術を生み出すためにも基礎的研究の重要性が痛感されます。まさに一つの曲がり角にあると考えられます。このことは当協会の運営についても言えるのではないのでしょうか。すなわち、業務範囲、活動範囲は現状で十分とは申せませんが、その拡大をはかるよりは内容の充実に努力する時期にあると考えます。例えば「鉄と鋼」Trans. ISIJ等の刊行物についても冊数、ページ数の増大を抑えて内容面の充実を図るなど困難ではありますが知恵を出して実行する時に来ているのではないのでしょうか。

次に研究体制について、大学、国立研究機関、企業それぞれでどうあるべきか考えてみる必要があるかと思ひます。国家財政再建が叫ばれ小さい政府を望む声が強くなつてきていること、企業の研究体制が整つて来ていることから研究面においても現状の見直しが要求されるでしょう。とくに国立研究機関のあるべき姿を具体的に検討してなるべく早期に関係者の合意を得ておく必要があるように思つています。

いずれにしても協会は会員皆様の協会です。より有効な活動ができますよう会員各位の御意見をどしどし出していただきたい。また維持会員の各社に対しましては従前の御支援に心から感謝申し上げますとともに今後の御協力、御指導を切にお願いいたします。